

都会の小学校に通う児童に 自然に親しむ意欲を抱かせるためのネイチャーゲームの活用

記入日：2011年 3月 11日
都内私立小学校 教諭 (山本 大輝)

0. 課題

私の勤務する小学校は東京の都心といわれる某区に位置する。小学校の周辺環境は、大規模商業地域として賑わいを見せている。本校に通う児童と自然環境とのつながりを考えたとき、様々な課題が存在する。

第一に、自然環境の乏しさである。幸い、校内には乏しいながらも多少の緑が見られるものの学校から一歩外に出ると、高層建築や道路などの人工物が溢れ、子どもたちが自然を感じられるものは少ない。幸い、都会の学校としては貴重な土の校庭と、学校の歴史が育んだ樹高の高い樹木が数十本はあるが、自然の植生からは程遠いものである。

第二に、児童の体験活動の乏しさである。児童の直接体験、特に自然体験や遊びのあり方に課題が大きいと感じている。土や虫に触れない児童、習い事に追われて時間的な余裕がない児童、地域での遊びの拠点を持たない児童が多い。

こうした実態をかんがみて、子どもたちに質の高い自然体験活動を提供したいと、常日頃から考えている。

1. 仮説

本校の母体となる学院が、長野県K町に「O寮」という施設を所有している。この施設の周辺は、K町の自然が豊かに維持されており、児童が日常、学校生活を送っている校地と比べて、自然という点においては申し分のない環境を有している。

このO寮において、本校では「夏期学校」という行事を例年行っている。しかしながら、上述した背景から単に児童を豊かな自然環境に連れ出すだけでは、夏期学校を行う意義を高めるには措置が不十分であり、教員が適切な支援を行うことで児童がより質の高い自然体験を行うことができるようになることを考える。幼少期より自然に接する経験が不足して成長した児童たちは、自然環境の中にその身をおいたときに、はしゃぎまわって遊びに興じることはあっても、自然の中にみられる生物相互の営みや、造形の美しさ、豊かな恵みに関心をもって意識を向けることが難しい面がある。

そこで、上記夏期学校に入る直前期において、通常授業の中で自然に親しむことを促す活動を行うことで、実際に自然環境の中に出たときに、児童がより豊かなかかわりを持つことができるのではないかと考えた。ネイチャーゲームの手法を用いることで、児童が楽しみのうちに意欲を抱くことを期待する。そこで、以下のように仮説を設定した。

【仮説】

ネイチャーゲームの手法をもって自然に親しむことを促す活動を行うことにより、都会の学校に通う児童が自然環境の中に出た際に、より豊かなかかわりを持つことができるようになる。

2. 実践

前節の仮説を実証するため、次のような実践を行った。

- 対 象 : 本校児童 80名 (小学校第3学年 1組および2組 各組40名)
- 日 時 : 2010年7月初旬 理科の授業内。各組1校時(40分間) ずつ
- 場 所 : 本校ピロティ (正門と校舎の間に存する植栽がある空間)
- 内 容 : ネイチャーゲームを通して、児童に自然に親しむ意欲を抱かせる。
中心アクティビティはカモフラージュとする。

小学校では現行の学習指導要領上は第3学年から理科の学習が始まる。旧来、低学年において設置されていた理科（と社会科）は、現在は行われず、代わりに生活科という教科で自然とかかわる内容が指導されている。対象児童も低学年期に生活科の学習としてアサガオやミニトマトの栽培、蟻などの身近な昆虫の観察を経験している。また、第3学年に進級してのち、理科の学習としてもホウセンカや蝶などの観察を続けてきた。それらの学習を通じて、児童は自然観察の際の最も基礎的な約束事を身につけてきている。すなわち、色・形・大きさに気を付けて観察すること、数値で表記できることはそのように記録すること、スケッチは線を途切れさせずに見たままを描くことなどである。

児童は、これらの経験から、学校の授業で自然を観察する際には科学的な視点に立脚することが望まれると感じ取っている。しかしながらその約束事を守る意識は、教師の側から提示された条件に従うことで達成できるものという感覚からきている場合が多く、児童自身が自然の在り様に対して主体的に関わりをもつなかで育まれたものではない。

そこで、本実践ではネイチャーゲームを児童が楽しみながら、その過程において自然の在り様に気づき、より豊かなかわりを持つことができるようなきっかけとしたいと考えた。アクティビティは、カモフラージュを選択した。その理由は、児童がこれまで行ってきた観察の約束のうち、「色・形・大きさに気を付ける」という点が、人工物を自然物の中から探すというアクティビティの内容と関連があることが大きい。振り返りを行う際には、その点についても言及できようことが予想された。

実践を翌日に控えて、活動場所の下見を行った。本校正門の内側には、ピロティと、その中央に外周が30メートルほどの楕円形をした植栽がある。植栽の内側と外部とは、大人の拳大の石によって仕切られており、外側からは内側の様子は十分に観察ができる。植栽の中には、過去に切り倒されたブナと思われる切り株やカエデ、モミジ、カシ、マツ等に加え、背の低い草本類が適度な間を開けて植えられている。ここに設置する人工物を手に、どこにカモフラージュさせるかを考えてシュミレーションしておいた。

実践を行う日は、天候だけが懸念要素であったが、無事に青空が広がっていた。当日の準備としては、朝の児童が登校した後に人工物をセットしておいた。あわせて、手元のメモに指導者自身の覚えとして、どこに何を置いたかをメモしておいた。

実践は、理科の授業の中で行ったが、集合をピロティとして時間の節約に努めた。チャイムが鳴ると同時にピロティで挨拶をして授業を開始した。はじめに屋外に出たことに加えて、導入的に「音いくつ」を行った。その場で感じられる音について、子どもたちは自動車などのエンジン音、人の歩く足音、鳥のさえずり、風の鳴る音、衣擦れの音など様々に挙げていた。指導者が今日の中心活動となるカモフラージュについて説明し、ルールなどを確認した後に実際にアクティビティを行った。児童は、なかなか見つけられないで苦労したり、思わず指をさしてしまったりしていたがおおむね楽しみながら活動をしていた。時間を区切って活動を終え、その場での振り返りを行った後、教室に戻って擬態の説明をしたり、関連する文章として国語の教科書に掲載されている『自然のかくし絵』の文章を読んだりして授業を終えた。ちなみに振り返りの中では、「(人工物と自然物の)色や形が似ているとわかりにくい」などという声も上がり、日ごろ観察で意識をしている「色・形・大きさ」といったことがよく意識されていることが分かった。

3. 検証

以上、述べたような実践を行った後に、7月中旬にK町で2泊3日の宿泊学習を行った。現地では、寮から遠足に出たり、寮の庭や周囲の自然の中で遊んだりする時間がある。遠足の途中の道で動植物について話したり、寮の周囲で自然を生かした遊びなどを行ったりする機会があった。その最中に偶然スズメガの幼虫を発見することができたので、実際に昆虫が擬態している様子を観察する機会をもてた。全員の児童というわけにはいかなかったが、その場に居合わせた児童と観察を行ったところ、学校のある校地で行なったネイチャーゲームを思い出す児童が多数いた。その後、自然の中に上手に隠れているものをいろいろと探し始め、教師に都度報告してくるようになった。また、隠れているわけではなくても、反対に自然物の中で人工物に似ているものを考えて教師に報告してきた。

こうした児童の姿を見ると、都会の校地で行なったネイチャーゲームがきっかけとなり、自然豊かな環境に出て行ったときに主体的に目の前の物事に関わっていく態度が育まれたものと考えら

れる。したがって、先の仮説は妥当であると考えられる。

4. 総括

今回、ネイチャーゲームを使って児童に自然への案内をすることができた。ネイチャーゲームは子どもの感性を呼び起こす非常に価値のあるプログラムであることが再確認された。ところで、実は学校のあるの校地で行った実践授業は、授業参観日に行った。保護者の方々は、わが子と一緒に目輝かせながらカモフラージュに参加し、目を輝かせていた。このように親子で参加できるプログラムを組んだことによって、実践の中で親子の交流を促すことができたのも非常によかったと考えている。今後も、都会の学校で子どもたちと生活を共にする立場として、ネイチャーゲームの活用を図りながら子どもたちの自然案内人になれるよう努力してゆきたい。

5. 本報告を参考にされる方へ

本実践は、小学校の理科の授業の中で行ったものであるが、実際には授業時間数が足りないことを常に嘆いている学校現場でたとえ1時間でもこのような余裕時間を確保することは非常に困難である。今回は、授業参観に当て込むことで、余裕時間を捻出することができた。保護者へのアピールも含めて、授業参観のような特別時程の日実践を行うのもひとつのアイデアであると考えられる。

6. 活動写真



活動を行った植栽



植栽の先にある正門